

とう 塔

国分寺を象徴する七重塔

3間×3間、基壇の規模は一辺17.82mと推定されます。

出土した遺物から、平安時代中期には廃絶したと考えられます。現在、露出した心礎の上には石造七重層塔が建てられています。

一般的な寺院では塔に釈迦の骨を納めますが、国分寺では経典を納めていました。

かいろう

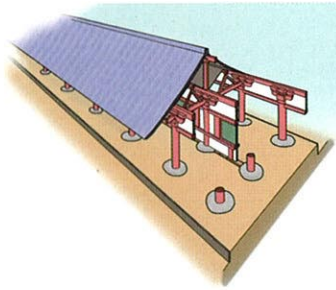
回廊

建物をつなぐ廊下

複廊式の回廊が中門を發し、講堂に付くことが判明しました。

一般的な寺院で単廊式が主流だったのに対し、複廊式は平城京内の大規模な寺院などの回廊で用いられていました。

全国の国分寺の中でも複廊式の回廊は珍しく、他の国分寺と比べ立派な回廊がめぐっていたようです。



複廊模式図

なんもん ちゅうもん

南門・中門

出入りする門

南門は桁行5間×梁行2間、5間3戸の門で、基壇の規模は東西23.17m、南北12.47m。重層の入母屋造りの屋根と考えられ、中門よりも大きな門であったようです。講堂と同様、補修を重ねながら維持された建物の一つです。

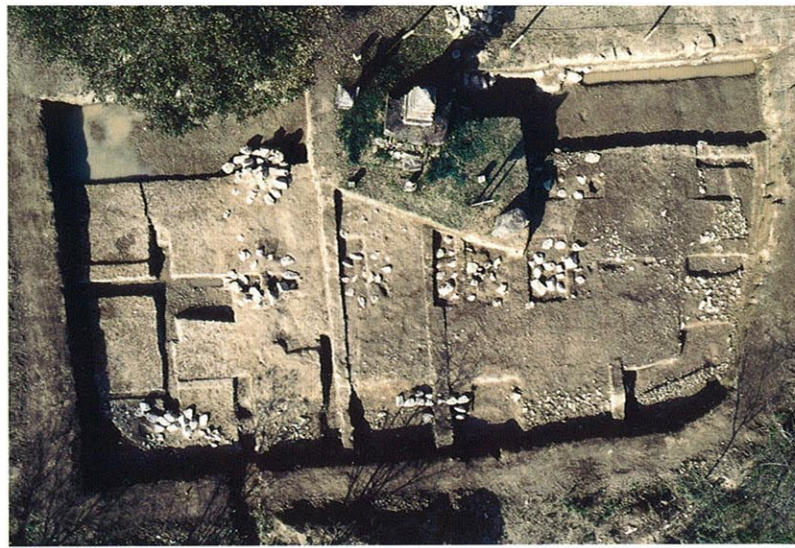
中門は桁行5間×梁行2間、5間3戸の門で、基壇の規模は東西21.68m、南北10.69m。屋根は単層の切妻造りと考えられます。

せきぞうしちじゅうそうとう

石造七重層塔

市指定文化財 平成2年3月20日指定

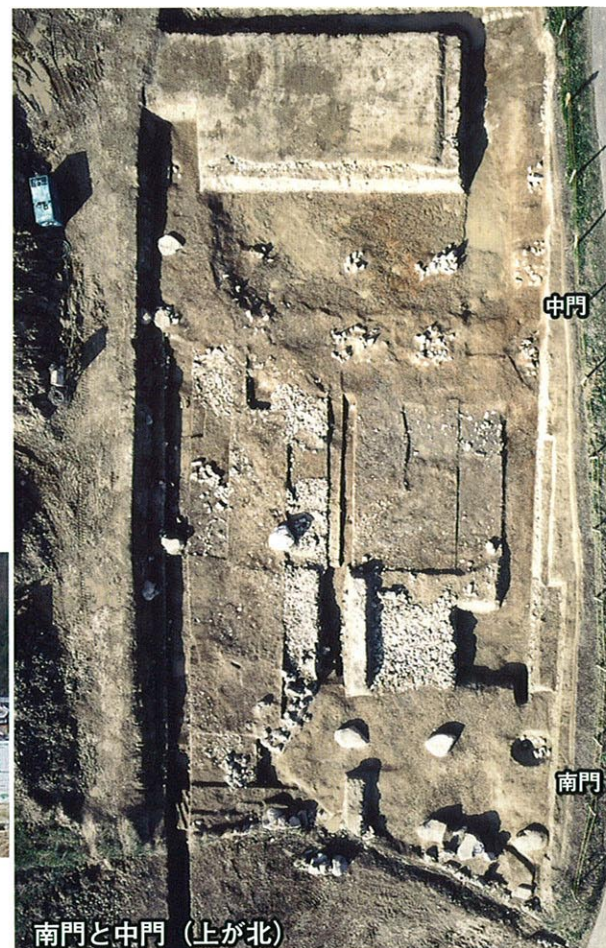
塔跡の心礎の上に建つ石造りの塔。花崗岩製で、鎌倉時代後期の作と推定されます。



塔の調査全景（上が北）



北側の回廊 礎石と大量の瓦（南西から）



南門と中門（上が北）